

私たちににとって望ましいイノベーションとは

『携帯電話産業の進化プロセス』を刊行して

丸川 知雄

使えない日本の携帯電話

本誌の読者のなかで携帯電話が好き
な人は少ないのではないだろうか。人
が一生懸命に講義をしている時に、一
心不乱に携帯電話のキーを打ち続ける
学生を目障りに感じる教師は私だけで
はないだろう。一日に何十通も友人と
携帯でメールをやりとりしている若者
も多いと聞く。カレシからメールが来
たら一時間以内に返信しないとカレシ
が怒り出すの、なんて話を聞くと、悪

いこと言わないからそんなケータイ中
毒の男とは別れてしまいなさいよ、と
助言の一つでもしたくなる。それでも
我々はみんな携帯電話を持っている。
公衆電話がほとんど消え失せた今、携
帯電話がなくては不便でしょうがない
からだ。だが、実際のところ携帯電話
を使っているかというと、銀行口座か
ら毎月引き落とされる利用料に比べ
て、携帯電話が役立っている感がな
い。筆者の場合、過去一ヶ月間に携帯
電話で電話した回数は発信・受信とも

一〇回ほど、携帯メールたるや送信・
受信とも各一通ずつしかない。仕事
でもっと使ってもよさそうなものだ
が、日本ではなぜか余り親しくない相
手の携帯電話に電話することは失礼だ
と考えられており、実際にかけてくる
のは家族とごく親しい仕事仲間ぐらい
しかない。
だが、そんな筆者も中国に行くとい
変する。筆者は中国に出張したときに
使う携帯電話機と電話番号とを持って
おり、飛行機を降りた瞬間から、携帯

電話は面談のアポイントをとったり、
道順を教えてもらったり、渋滞による
遅刻をわびたり、ホテルや航空券を予
約したり、と大活躍である。中国の人
たちは名刺に携帯電話番号を刷り込ん
でおり、余り面識のない相手であつて
もいきなり携帯電話に電話すること
は何ら失礼なこととはみなされていな
い。中国では、例えば同じ会社内の人
と連絡をとる際にも内線電話ではなく
て携帯電話を使う。確かにその方が

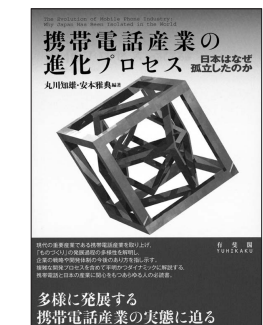
お戻りになりますか」等々の無駄な会
話が省けて合理的だ。ただ、中国では
携帯電話が余りにも活用されすぎてい
て、誰かをインタビュアしている時で
も携帯電話が鳴って話が中断されるこ
とがしばしばである。

社会・文化とイノベーション

「いま席を外しております」「ではいつ

携帯電話の利用状況における日中間
の違いは、携帯電話の技術にも反映し
ている。日本では携帯電話が電話とし
て使いづらいため携帯電話の電話以外
の機能が発達している。インターネット
ト閲覧、カメラ、音楽プレイヤー、G
PS（自分の所在地を示す機能）、ワ
ンセグ、おサイフケータイ、複雑なゲ
ームなど、技術的には高度な機能が日
本の携帯電話では当たり前のように装
備されている。

らしいは中級以上の機種にはたいてい
いているが、むしろ携帯電話がどこで
もつながるように配慮されていること
の方が印象的である。例えば、地下鉄
やエレベーターのなかでも電波が届く
し、電話線が通じていないような内陸
部の貧困な山村にさえも携帯電話の電
波はしっかり届いていた。一方、東京
の地下鉄の中には携帯電話の電波が届
かない。



丸川知雄・安本雅典 [編著]
『携帯電話産業の進化プロセス』
A5判、318頁、3990円（税込）

中国でも音楽プレイヤーやカメラが

日本で携帯電話が電話として使いつ
らいのは電波のカバー範囲という物理
的な問題よりも、社会的な制約による
部分が大きい。例えば、電車の車内で
は携帯電話の使用を遠慮するように絶
え間なくアナウンスされる。本来携帯
電話の技術とは、高速移動中に途切れ
ることなく通話できる技術であるか
ら、電車や自動車のなかで携帯電話を
使用できないというのは携帯電話の存

在意義そのものを否定するのに近い。電車のなかで携帯電話を使わせない理由として「心臓ペースメーカーに悪影響を与える恐れがあるから」だと説明されるが、これは科学的根拠に乏しい。送信出力〇・三Wの携帯電話から三〇センチ離れた場所で受ける電波の強さ（電力束密度）は、出力五〇kWのテレビ送信局から一二メートル離れた場所では受ける電波の強さと同じである。だが、「ペースメーカーをつけた人は危ないから東京タワーに近づかないでください」という注意書きは真間にして見たことがない。

余り合理性のない理由によって携帯電話の利便性が大きく制約されているのに携帯電話会社がそうした制限に抗議したという話は聞かない。実は通話の利便性を制約することが、通話以外の収入を増やしたい携帯電話会社の利

害とも合致しているからではないか、と勘ぐりたくもなる。

歪んだイノベーション

携帯電話に、GPS、おサイフケータイ、ワンセグなど異なる電波を扱う機能を搭載することは技術的にはかなり難しい。日本の携帯電話メーカーのエンジニアたちにインタビューすると、彼らは通話機能のことを「もしもし、ハイハイの機能」と軽蔑的に表現し、中国や発展途上国の大多数の携帯電話ユーザーが利用しているGSMという技術は「枯れた技術」だとする。携帯電話の機能高度化の先頭を走ってきたという自負が言葉のそこかしこから感じられる。

だが、エンジニアたちが苦勞し、そして実は我々がそのコストを支払って、携帯電話に載せられてきたこれら

の機能は果たしてどれほどの役に立っているのだろうか。筆者は電車の車内でたまにワンセグ・テレビの視聴を試みるが、数分以内に画面はフリーズし、電車が駅構内に入ると受信不能となる。日本に携帯電話加入者が一億人いるうち七五〇〇万人がワンセグ機能付き携帯電話を持っているが、その割に街でワンセグを視聴している人を見かけることが稀なのは、実際のところこの機能が「使えない」からではないだろうか。

携帯電話のGPS機能もカーナビに比べて精度が低く、およそ役に立たない。カメラ機能はデジカメと比べべくもなく、たまにカメラを忘れたときに使うのみである。おサイフケータイ機能はSuicaが無料で使える間は使っていたが、有料化されてから使うのをやめた。音楽プレーヤー機

能に関しては、数曲ダウンロードしてみたが、驚いたことに有料でダウンロードしたにもかかわらず、機種変更をしたら新しい機種にそれらの曲を移せないと言われ、それに懲りてダウンロードすることはやめた。携帯電話によるインターネット閲覧も、多少なりとも役に立ちそうなサイトがあると、それは月額数百円かの利用料を要求するので余り使わない。結局、日本の携帯電話にてんこ盛りにされた高度の機能のどれもが中途半端で、「使えない」

のだ。

一方、日本のエンジニアたちが「枯れた技術」と呼んで軽蔑する中国の携帯電話には、日本の携帯電話にはない機能が盛り込まれている。例えば、メールの手書き入力機能だ。パソコンでローマ字入力するのに慣れた筆者にとって、携帯電話のテンキーで「あいうえ……」と目指す文字を探してメールを入力するのは大変苦痛である。中国では携帯電話の画面をペンでなぞって手書き入力できる機種が多数発売さ

れており、これであれば筆者ももう少し楽にメールが書けるのにとと思うが、日本には手書き入力機能を備えた機種はない。また、QWERTYキーボードを備えた「スマートフォン」やタッチパネルを活用する機種（例えばiPhone）の日本での登場は欧米よりも何年も遅れた。

日本のエンジニアたちにとって格別難しくはないはずの手書き入力、キーボード、タッチパネルといった技術が日本の携帯電話になかなか応用されて

こなかったのは、日本の携帯電話が一日に何十通もテンキーでメールを入力するヘビーユーザーたちのことだけを考慮して作られてきたからだ。日本の携帯電話は、テンキーなどのスイッチの耐久性がきわめて高く作られている。iPhoneのタッチパネルの技術は日本メーカーにとってなんら新しいものではないが、タッチパネルはガラスでできているため一日に何十通もメールを打つと余り長くは持たない、ということで携帯電話に応用されなかった。また、テンキーに慣れた若者たちには手書き入力など不要だから最初から搭載が検討されなかった。こうして筆者のようなユーザーのニーズは省みられることがなかった。

世界の先頭を走っていると自負していた日本の携帯電話産業のイノベーションがむしろ奇妙な方向に走っている

らしいと認識されるようになったのは、二〇〇五〜二〇〇六年にパナソニックやNECなど日本の代表的な携帯電話メーカーが海外市場での不振のため、次々と海外市場からの撤退を決めたことがきっかけである。世界ではノキア（フィンランド）やサムスン（韓国）が欧米や新興国の市場を席巻してシェアをますます拡大する一方、日本メーカーは早くから海外市場へ取り組んできたにもかかわらず、日本と違って通話と簡単なメールさえできれば携帯電話は安い方がいいという海外市場に適応できず、今や日本の全メーカーの世界シェアを足し合わせても5%に届かない。近年日本メーカーは日本への引きこもり傾向を強めているが、その日本市場は飽和しきっており、携帯電話の販売台数は減少傾向にある。数年前から日本は携帯電話産業が特異な

方向へ進化した「ガラバゴス諸島」だという自嘲的な声が業界の内外から聞かれるようになった。

日本メーカーが一生懸命携帯電話を進化させるために頑張ってきたにも関わらず、どうして日本の携帯電話産業は「ガラバゴス化」の袋小路に迷い込んでしまったのか。その謎を解明するには、日本と対照的な方向に携帯電話産業が進化した中国と比較するのが有効である。そうした考えから携帯電話産業の日中比較を中心とした『携帯電話産業の進化プロセス…日本はなぜ孤立したのか』をこのほど刊行した。これから先はぜひ本書を読んでいただきたい。

（まるかわ・ともお）

— 東京大学社会科学研究所教授 —